

氏名	あおきつぎお 青木次生
学位(専攻分野)	博士(文学)
学位記番号	論文博第403号
学位授与の日付	平成13年1月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文題目	ヘンリー・ジェームズ

論文調査委員 (主査) 教授 中村 紘一 助教授 佐々木 徹 助教授 若島 正

論 文 内 容 の 要 旨

ヘンリー・ジェームズの中・後期の作品群はかねてきわめて高い評価を受けていたにもかかわらず、ごく最近まで、アメリカ文学の専門的な研究者にとってさえ近付きがたい存在であった。文章の難解に加えて、一節、一文にいたるまで小説的内容の密度が濃厚で、極度の集中的・継続的な精読を読者に要求するばかりか、たとえば冒頭のさほど重要とは思われなかった出来事を数百ページ後に、語り手の指示なしに想起参照しなければ、読者が物語の展開を理解できないというような、読者の記憶力に過大と思われるような信頼を置く手法をジェームズが愛好したからでもあろうか。提出させて頂いた『ヘンリー・ジェームズ』研究は、『アメリカ文学研究』に海老根静江氏がお寄せくださった書評から、いささか過褒に類する文言が含まれていることを承知のうえで引用させて頂くなら、「長年にわたって考えるだに気の遠くなりそうな精力が注がれたと想像されるヘンリー・ジェームズの翻訳を通してジェームズを味わいつくした著者にのみ可能なもの」であるが、私のそうした翻訳と研究の作業は、19世紀末から20世紀初頭にかけてつぎつぎに完成された『メイジーの知ったこと』(*What Maisie Knew*)、『檻の中』(*In the Cage*)、『厄介な年頃』(*The Awkward Age*)、『聖なる泉』(*The Sacred Fount*)、『使者たち』(*The Ambassadors*, 工藤好美と共訳)、『鳩の翼』(*The Wings of the Dove*)、『金色の盃』(*The Golden Bowl*)など、中・後期のヘンリー・ジェームズを代表する傑作のほとんど全てを網羅している。願わくば私の仕事を全体として、翻訳と論究を切り離さない形で、日本におけるジェームズ理解の一時期を画するものとして評価頂きたいところであるが、こうして論考だけをまとめた書物にも、それなりの存在理由があると信じる。ただ、最初から学位請求論集として編纂されたものではなかったために、一部分、中・後期に属さない作品や話題についての文章があることをご寛恕頂きたい。

ジェームズの文学世界はきわめて多彩であり変化に富んだものであって、単純なアプローチを拒否するところがある。したがって私の研究方法も視点の想像過剰性に重点を置くという基本的な一貫性を保ちながらも、作品の特色に応じて柔軟でなければならなかった。その中で、他の作品にも適用可能と信じる研究例のひとつは、「末裔の告白——『アスパンの恋文』加筆」である。『ある貴婦人の肖像』の加筆についてのF. O. マシーセンの優れた検討があるにもかかわらず、初期の作品に晩年のジェームズが加えた加筆・訂正は、どちらかといえば疑問視されることが多かった。私の検討はことに中期の作品については、ジェームズの加筆は緻密な検討に値するまさに巨匠の手腕であり、解釈の分かれる作品について、決定的な論拠となる場合のあることを証明したものである。

ジェームズがニューヨーク版自選集のために書いた精緻・難解を極める序文を読み解くことの重要性を——ジェームズの作品の読み方をジェームズ自身から教わる謙虚な作業の必要を一実証したのは、[巨匠の戯れ——『ねじの回転』]である。この論争の対象となることの多い問題の小説を論じようとする読者がまず理解しなければならないのは、ジェームズ自身による自信に満ちた解説ではなかったか。この作品の巧妙な手法は予想外の大成功であって、その証拠の中には滑稽なものさえあった、とジェームズは書いている。「幽霊の恐ろしさを誇張しすぎたとか、細部をあまりにも強調したのはおぞましいとかいった非難を受けたとき、計算どおりにうまく書けなかったとか、苦心の暗示に読者がかかってくれなかったとかなど、と私が感じたはずがあろうか。この作品には最初から最後まで悪の詳細な描写などこれっぽっちもありはしないばかりか、

読者自身が恐怖心に襲われ、同情をかきたてられ、巧妙な読み方を作り出し、多かれ少なかれ奇怪な画像をその中へ読み込もうとしないかぎり、私の絵には明暗が全く欠けており、完全な空白があるにすぎない。それにしても作者にとって実に興味深く、修身のお説教の題目としてもびったりだと思われるのは、勝手に自分で想像をたくましくし、ぞくぞくするような恐怖感を楽しんだあげく、恐ろしい話を書いたとって作者に対して単純に憤激する読者の反応である。想像をたくましくしたのは自分自身なのに、そのような読者は責任を作者になすりつけ、作者を不道德だといって非難する——作者のほうは完璧という理想を固く守っていただけであるのに。」ジェイムズによる自作解説は、他の作品の場合にも、読者が忘れることを許さない存在なのである。

ジェイムズの小説世界の多彩と豊穡をあえて無視して単純化を試みるならば、精緻をきわめる難解な文体の味読を志す読者の前に展開するのは、読者自身が批判的な判断力を失って巻き込まれ、取り込まれてしまいそうな空想過剰の世界と、そのような過剰な想像力の世界を現実の世界に繋ぎ止めて離さない入念な現実主義者の視点である。しかもジェイムズの場合、空想過剰の世界としたたかな現実主義の相対的な比重は、作品によってじつに大胆に変化する。『聖なる泉』のなかで作家と思われる人物が田舎の別邸に招かれた客人たちの男女関係をめぐって延々と展開する空想は、見方によれば挫折した小説の構想であり、ある登場人物に批評させればまさに気違いざたであるのに対して、『檻の中』の貧しい女郵便局員が上流階級の男女関係をめぐって展開する想像の世界は、確実に彼女自身の現実の生活に裏打ちされていて、その想像と現実の対比のなかに読者は世紀末のイギリス上流社会の退廃的な風俗に対するジェイムズの批判と、貧しい生活を誠実に生きる人々に寄せる同情を読み取ることができる。

『厄介な年頃』が読者に要求するのは、過剰な想像力の展開を批判的に分析する視点ではなくて、極力登場人物たちの会話だけから成立しているこの小説のその緻密・精妙な会話を手がかりとして、事態の展開を理解していく構築的な想像力である。ジェイムズの作品を味読するということは、ジェイムズのテキストを手がかりに、読者が読者自身の物語を創造することだとさえ言える場合が多いが、その趣は特にこの『厄介な年頃』において著しい。加えてこの作品の登場人物たちの会話には、無数の大嘘小嘘がちりばめられているが、語り手がそれらの嘘の存在を読者に指摘してくれることはほとんどないから、読者自身が無数の嘘を探り出し、作品中の検証可能な事実と照合検討することによって、登場人物たちの品性の卑しさばかりではなく、温かな思いやりや誠実な人柄などさえも理解しなければならない。中・後期の諸作品の中でジェイムズが嘘の文学的社会的効用をどのようなかたちで重要視してきたかは、詳細な検討に値する。

ジェイムズ円熟期の三大作、『使者たち』、『鳩の翼』、『金色の盃』のうち講談社1968年版の『使者たち』は青木の下訳に恩師故工藤好美先生が第三部までかなりの加筆訂正を行なったものである。この秀作は特にこの部分が錯綜した叙述の密度が濃厚で、ただたんに翻訳の表現に苦勞するばかりか、当時のジェイムズ研究の水準では、文意の把握自体が困難だったのである。国書刊行会1984年版の『使者たち』では同じく第三部まで青木が故工藤先生の加筆訂正にさらにかかなりの加筆訂正を加えている。そこにジェイムズ研究の進歩が見られるが否かを論じることができるような厳密な翻訳批評がわが国ではいまだに確立していないことを遺憾とする。ジェイムズが好んで描いた想像力の人とは、想像力過剰の人であり、ジェイムズの文学ではロマンチズムはリアリズムの中へ消滅していくのだということを論じて日本英文学会の『英文学研究』に発表した拙文は、その後の私のジェイムズ研究の出発点ではあるが、その他の学会論文と同様、この論集に採録しなかった。

死に至る病苦をジェイムズ自身の言葉を借りれば「芸術の美と威厳で」包もうとした『鳩の翼』を論じて、死期が迫るといふ救いようのない現実を認めながら、病者の側からは自尊心と見守ってくれる友人たちに対す同情・感謝から、生き残る者たちの側からは憐憫や遺産の入手、自分たち自身の日常的平静の維持、その他の利己的・金銭的な動機から、そのような現実の上に、巧みに、薄く、美しいロマンスの覆いを——飾られた嘘を——かけていくジェイムズの手法を指摘した文章が、率直に言って私の気に入りの文章の一つであるにもかかわらず、あくまでも入念な解説だという気持ちが付きまとうのに対して、『金色の盃』を解説した文章については私の代表的な研究論文の一つであるという気持ちが深いのは、この優れた長編小説の批評史に無視できない一ページを書き加えたものとして、特に自負するところがあるからであろう。

アメリカの若い女性マギーの純真・無垢がヨーロッパの退廃を救うのだというのは、多くの『金色の盃』論の中にさまざまに形を変えて生き続けていた前提であった。しかし、マギーの心中に展開する想像の世界の中に完全に呑み込まれ、取り込まれてしまわないかぎりは、そのような前提を翻訳の作業によって作品のなかに検証することは到底不可能であって、そ

のような前提が多くの人々に受け入れられていたのは、ジェームズ研究の最盛期が第二次世界大戦後の荒廃した世界の復興のためにアメリカが重要な役割を演じていた時代と重なりあっていたことと無関係ではないように思われる。この秀作の他の登場人物についても同様の、その時代の状況を考慮に入れることが必要である。若くて賢明な妻をえたマギーの父親アダム・ヴァーヴァーについて、その誠実な愛情や、新しい幸せを娘に見せつけることを躊躇する古風な人柄を描くジェームズの入念な筆致が検討されることのなかったのは、彼が大富豪であるということ——要するに当時の文学批評の中に意識的無意識的に浸透していた反資本主義的な発想が原因だったのではないであろうか。事実、第二次世界大戦後の盛んなヘンリー・ジェームズ研究に決定的な影響を与えたF.O. マシーセンの『ヘンリー・ジェームズ——円熟期の研究』（1944）の最大の問題点はそのキリスト教的社会主義であった。アメリカ人マギーの純真・無垢が称賛されるということは取りも直さずイタリア人の夫、アメリゴ公爵の忍耐と誠実が無視されることであり、また彼と肉体関係の過去があり、ただ一度だけ浮気をあえてしたアダムの若い妻シャーロットがヨーロッパに毒されたよからぬ女とみなされ、恵まれた生活を得た彼女のたくましい人間的成長が称賛の対象として検討されることがなかったという事実と無関係ではないであろう。

マギーには家庭生活について模範となり、助言を与えてくれる母親がいない。何事につけても助言を拒んで一人で思い募ることの多い彼女の停滞しがちな人間的成長の背景には、ジェームズの数多くの作品の背景となっている家族の崩壊、ことに急速に変化する風俗の中で母親が若い娘に対する教育的指導性を喪失していく現象がある。『メイジーの知ったこと』を論じた時には、金銭がらみ、色恋ざたの人間関係が常に対称形を保ちながら急速に展開する風刺的な喜劇の実験的な手法が中心的な関心であったけれども、ひるがえって考えてみれば彼女の成長もまた崩壊した家族関係の中での事実である。かつての私にはジェームズの文学を自閉症的な閉ざされた世界として理解しようとする傾きがあったけれども、この頃になって、まだ詳細な検討をへていない大きな社会的な広がりがあるのだという気持ちがある。たとえば初期の代表的傑作とされる『ある貴婦人の肖像』なども、当時のフェミニストが挫折に終わった皮肉な物語として、当時の風俗や当時の女性解放論との関連性を調査してみる価値は十分にありそうに思われる。

論文審査の結果の要旨

ヘンリー・ジェームズ（1843—1916）はアメリカの最も優れた小説家の一人でありながら、その作品は文章が難解であるに加えて、読者に対して極度の集中的・継続的な精読と作品中の出来事について過度の記憶力を要求するために、専門の研究者にすら容易に近づきがたいものであった。論者はその中でもとりわけ難解とされる中・後期の作品『厄介な年頃』（*The Awkward Age*, 1899）、『聖なる泉』（*The Sacred Fount*, 1901）、『鳩の翼』（*The Wings of the Dove*, 1902）、『使者たち』（*The Ambassadors*, 1903）、『金色の盃』（*The Golden Bowl*, 1904）などを半生をかけて翻訳出版してきた。論者の『ヘンリー・ジェームズ』（芳賀書店、1998）研究はそれぞれの翻訳に付した論考を集大成したものである。

その論考について2つの特徴をあげることができる。1つは、論者は自分の翻訳を横に置いて作品を論じているのだから、その論考には有無を言わさぬ説得力があることである。これは文学の場合、翻訳ということ自体が作品の一つの解釈であるから当然のことと言えるが、作品理解の最良の方法と信ずる論者の翻訳に対する取り組みは決して生やさしいものではない。例えば、論者は1968年工藤好美と共訳で『使者たち』（講談社）を発表したが、その出来映えに飽きたらず1984年にはそれに改訂を施して出版する（国書刊行会）。

また、『金色の盃』（1989）の翻訳にあたっては、すでにあつた工藤好美訳の『黄金の盃』とは決定的な解釈の相違を明らかにする。一例を挙げれば、作品冒頭の一文“The Prince had always liked his London, when it had come to him,”の工藤訳「公爵はロンドンに来ると——というよりは、むしろロンドンが向こうから彼のところにくると——これこそわが町と言いたくなるくらい、いつもここが好きになるのだった」を苦心、入念の訳だと認めながらも、やはりまずいと考える。その理由は公爵がロンドンを「好んだ」のも「思い出した」のもともに過去完了形、つまり、彼が今ロンドンに来ている現在に対して過去のことであったからである。さらに、思い出すといっても、積極的に思い出すというよりも思い出のほうがか浮かんでくれればの話である。それに彼の好きなのは「彼の」ロンドン、つまり「彼の知るロンドン」である。そこで論者は「かつて公爵は、思い出した時にはいつも、彼の知るロンドンが好きだった」とする。こうすると、彼の知るロンドンとはどのようなロンドンなのか、そのロンドンをかつて懐かしんだ公爵が、今、格別な喜びを感じていないのはなぜか。

積極的に思い出そうともしないのに、なぜ今、彼はロンドンに来ているのか、といった疑問を読者に呼び起こすことになるが、それこそこの作品の重要な解釈に結びつく論者は考えたのである。

さらに、作品名「黄金の盃」を「金色の盃」にしたことについても、実は、娘マギーが父の誕生祝いに買った盃は瑕物の水晶の上に金のメッキを施したものであった。論者はこれを「美術品を買うような態度でイタリア貴族アメリゴ公爵と結婚しようとした金持ちのアメリカ人娘マギーがいわば一生に一度の買い物で瑕物を掴まされた現実」を意味していて、マギーはその現実気づいているがそれを覆い隠すために愛と結婚についての〈苦悩と贖罪と救済〉といった「途方もないロマンス」(妄想)をでっち上げるのだと考える。つまり、論者に拠れば、ジェームズは「黄金の盃」などといった「美化されたイメージによって人間関係を表現しようとしたのではなく、物事を美化しようとする(この場合妄想をでっち上げる)登場人物(マギー)たちを距離をおいて見つめているのである。」したがって、作品名も金色のメッキを施されているという現実を表す「金色の盃」が相応しいことになる。

2つ目の特徴は、論者が「金色の盃」に作品名を改訂したことにすでにその一端が窺われる。これまでこの作品の解釈は、F.O. マシーセンの『ヘンリー・ジェームズ——円熟期の研究』(1944)が第二次世界大戦後の盛んなヘンリー・ジェームズ研究に決定的な影響を与えてきたこと、しかもマシーセンがキリスト教的社会主義者であったことからしても、アメリカの若い女性マギーの純真・無垢がヨーロッパの退廃を救うのだとしていたずらに彼女を礼賛することにあつた。しかし、論者はそのような解釈は、読者がマギーの心中に展開する(でっち上げられる)妄想の世界(「途方もないロマンス」)にうつつを抜かしていることに他ならず、それを「緻密な翻訳の作業によって作品の中に検証することは到底不可能である」と断ずる。代わって、その他の人物たちの、すなわち、大富豪でありながらも、若くて賢明な妻シャーロットを得たマギーの父親アダムへの愛と愛情を、一度だけシャーロットと不倫を犯したとは言えその後は妻マギーに対して見せるアメリゴ公爵の忍耐と誠実を、そして、アダムとの恵まれた生活を得てからのシャーロットのたくましい人間的成長を読みとる。

このような解釈は論者の翻訳した長篇の諸作品のみならず『ねじの回転』などの中・短篇にも通ずることであり、総じてジェームズが描く中心人物(多くは女性)は、客観的な存在としてではなく、本人や誰か他の登場人物(時には語り手自身)の「意識に属するもの」、あるいはそれらの人物の「過剰な意識が作り出した虚像」であり、「こうした想像のロマンチズムに対して」ジェームズは「微妙にアイロニカルなリアリストの眼を」向けていると論者は執拗に主張する。反対にこれまで行われてきた解釈、例えば、『金色の盃』を論じて、「マギーと公爵の結婚の成功はアメリカとヨーロッパの〈融合〉と〈総合〉を象徴したものである」などという解釈は「ジェームズのような屈折した精神の持ち主が、イタリアの没落有閑貴族とアメリカの大金持ちの根無し草のような娘の結婚を通じて二つの文明の総合などというとてつもない理想を達成しようとしたなどは、最初から到底信じがたい」ものであり、もしそれを具体的に示す箇所があれば指摘して貰いたいとして、そのような解釈には、作品を緻密に読みもしないで論じるこれまでの研究者の「観念性の過剰と作品の存在感の希薄」が見られることを論者は指摘せずにおれない。これらの主張や指摘は、けだし、「長年にわたって考えるだに気の遠くなりそうな精力が注がれたと想像される翻訳を通してジェームズを味わいつくした著者(論者)にのみ可能なもの」なのである。

そうである論者ではあるが、「(かつての自分は)ジェームズの文学を自閉症的な閉ざされた世界として理解しようとする傾きがあったけれど、この頃になって、まだ詳細な検討をへていない社会的な広がりがあるのだという気持ち強い」と述懐する。そして、初期の作品『ある貴婦人の肖像』(*The Portrait of a Lady*, 1881)と「当時の風俗や女性解放論との関連性を調査してみる価値は十分にありそうに思われる」という。また、ジェームズの文体がなぜあれほどまでに複雑・曖昧で屈折したものになったのか、その理由は作家の持って生まれた気質なのか、あるいは、例えば、南北戦争に出征できなかったために意識的あるいは無意識のうちにその言い訳のような文体を身につけてしまったのかといった問題も検討される価値はありそうに思われる。いずれにしても今後の課題として期待される。

以上審査したところにより、本論文は博士(文学)の学位論文として価値あるものと認められる。2000年11月30日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。